

〔就狩詞少々覺悟之事〕一射まじき鳥の事略 中鳩

〔嬉遊笑覽十一〕仲間六部、下手談義に、年中江戸に住居しながら、日本回國とまかくしき顔つき、是を仲間六部といふ、昔はかやうのものを鳩のかひといへり略 中 浮世寛文十鳩の戒と

ありて、鳩は鶯の巢をよく作るを見て、それを學て巢を作れども、木の枝などを組て、その上に卵をうむ故枝の間をまれて碎く、それ故物ごと心得がほにふるまふものを鳩の戒といへり浮世

見合し浮世物語二 京にも田舎にも鳩の戒と云もの有て、萬のこの間を合せながら其根に入たることは、ひとつもなければ、又まらぬ事もなし、あれ是に成りかへく、うそをつきて世を渡る、是を鳩の戒と名付る事、鳩は人里近くすむものにて云々、鶯の巢をならひて作らむと、作りやうを見るには、き竹きれ柴の類を下にしき、その上に巢をかくる、それまでも見とゞけず、もはや心得たりと思ひ、木の枝に柴の折四五本を渡し、其上に木葉をまきて卵をうむに柴のあひ

だよりもれ落て打くだく、口傳も師傳もうけずして、只見及び聞及びたるに任せて、根に入らぬわざどもをまらぬことなく、覺がほなるは、鳩の巢にたとへたり、又秋になれば、鳩すなはち鷹となりて、鷹のまねするものなれば、時に隨ひ折によりて、色々になりかはり、世を渡る業をいたし、人をへつらひだますものを、鳩の戒とは申すとなり、

〔本草和名十五〕雀卵、一名屬音戸、一名黃口、一名鶉音晏、已上三、一名嘉賓常、栖集人家如賓客賓、矢名育丹、

遺拾和名須々美、

〔段注說文解字四上〕雀、依人小鳥也、今俗云麻雀雀者是也、其色褐、其鳴節、節足、足、禮器象之、曰雀、爵與

似蛤、高注呂覽曰、賓爵也、棲宿於人堂、宇有似賓客、故謂之賓爵、又有小雀、讀與爵同小亦聲也、

〔倭名類聚抄十八名〕雀、漢書陳勝傳云、燕雀安知鴻鵠之志哉、雀音且略反、古字與

雀名稱

音、在、二部、